

生物多様性研究分科会

～日常生活の延長線上で生物多様性を考える～

大 嶋 辰 也

1. はじめに

平成 22 年 11 月、名古屋市で「生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP10)」が開催された。その後の社会情勢をみる限り、生物多様性という言葉の認知度は高まったものの、その重要性が広く理解されたとは思えない。

一方で、“E C O”という言葉は確実に市民権を得て、日常生活のあらゆる場面で使われるようになった。しかし、現状は、“E C O＝環境を守る”という漠然としたイメージが先行し、それ以上の具体的な思考には至らないため、問題の本質が曖昧になっているように思える。

我が国では、生物多様性条約 (平成 4 年採択) を踏まえて「生物多様性国家戦略」が策定され、それに基づく具体的な施策が展開されている (図-1 参照)。また、平成 20 年には環境基本法の下位法として「生物多様性基本法」が施行され、生物多様性の保全と持続可能な利用について基本原則が定められた。

豊かな自然環境が残るとされる島根県において、この理解しにくい“生物多様性”や“ECO”という言葉の意味を日常生活の延長線上で考え、様々な人との意見交換を末永く行い、そこから得られた成果を地域に還元したい。そのような思いで生物多様性研究分科会を企画した。

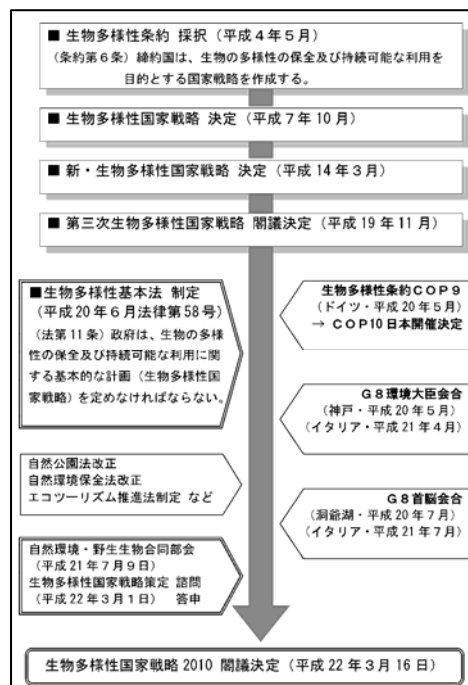


図-1 生物多様性国家戦略策定の経緯 (環境省HPより)

2. 平成 23 年度の活動概要

生物多様性研究分科会の初年度 (平成 23 年度) の活動概要は、表-1 に示すとおりである。

表-1 平成 23 年度の活動概要

期日	活動内容	概要	参加人数
8 月 27 日 (土)	第 1 回ミーティング	・研究分科会の立ち上げ主旨の説明 ・研究活動方針に係る意見交換	7 名
9 月 11 日 (日)	山王寺棚田の現地視察	・地元の方へのヒアリング ・現地視察及び現地での意見交換	8 名
9 月 25 日 (日)	山王寺棚田まつり	※イベント参加	2 名
10 月 10 日 (祝)	生物多様性勉強会	・生物多様性に関する勉強会 (講師: 佐藤技術士)	6 名
	第 2 回ミーティング	・「渡部農園」にて ・意見交換	6 名
	大原新田棚田の現地視察	・地元の方へのヒアリング ・現地視察	5 名
11 月 6 日 (日)	山王寺 沢池 外来種駆除	※各自個別参加	3 名
11 月 13 日 (日)	山王寺棚田 現地踏査	・生き物の生息・生育環境の状況確認	1 名
12 月 10 日 (土)	第 3 回ミーティング	・今後の活動に関する意見交換会	7 名

3. 平成 23 年度の活動記録

平成 23 年度における生物多様性研究分科会の参加者は、環境部門、建設部門（建設環境）を中心とした 9 名であった。活動内容は、「意見交換会」、「生物多様性に関する勉強会」、「生物多様性に関する意識調査（アンケート）」、「棚田を対象とした現地視察」の 4 項目を柱として実施した。以下に、各項目の活動概要を述べる。

3.1.意見交換会

生物多様性研究分科会は、平成 23 年度が活動初年度であるため、分科会の活動目的、方針、活動内容（平成 23 年度、中長期）等について意見交換を行った。

1) 研究分科会の立ち上げ主旨の説明

本研究部会は、単なる自然環境分野の研究ではなく、島根県内で取り組まれている様々な活動を題材として、人間生活と生物多様性との関係を見つめ、様々な視点を持つ人と意見交換しながら、自然環境保全、地域づくり（地域資源の掘り起こし）、環境教育などに貢献したい（活動のイメージは右記参照）。

〔活動イメージ（当初案）〕

- ①既往の自然環境保全活動への貢献
- ②既往の地域づくり活動の生物多様性の観点からの新たな意義の発見
- ③身近な自然資源の発掘、開発と環境とのバランス（環境情報の計画・設計への反映）、環境教育に関する材料の発掘

2) 意見交換会で出された主な意見

意見交換会で交わした主な意見について、「活動目的・方針」、「今後の研究活動の方向性」、「平成 23 年度の研究活動」の観点から以下に整理した。

〔活動目的・方針について〕

- ・生物多様性の重要性を感じてもらえるような活動を目指す。
 - 他の研究部会や設計等の技術者にアピールする内容（成功・失敗例の現地視察など）。
 - 環境と設計の技術士が現場で意見交換し、調査成果を設計に反映できる機会を設ける。アクセス～設計～管理～発注、各技術士が、生物多様性と言う意味で一貫していないため、これらをどの様に繋げて行けば良いかを地域の事例を踏まえて、PR し（県に）提言。
- ・生物多様性という言葉・概念を社会に浸透させる。
 - まずは技術士会から。それから社会へ。
- ・次の世代に向けて、学校などの総合学習の材料について研究する。
 - 地域特有の生態系を研究する。例えば、島根県の環境指標を探してもよいのでは。
- ・生物多様性に関する宣言を技術士会から宣言する〔里山に関して関東弁護士会が宣言〕
 - 仮に、地域性を出した宣言を技術士会から出せれば、かなりおもしろい。
- ・生物多様性に関する活動は広範に及ぶので、内容を絞り込む。
- ・全体像を把握してから年次計画を立てる。
- ・専門性の高い技術的な研究は無理。
- ・目的と計画期間を定めて活動する。
 - （例）第 1 回報告会 ⇒ 山王寺などの棚田の事例紹介
 - 第 2 回報告会 ⇒ 環境配慮事例の紹介（他の技術士が自分の問題として捉える事の出来る事例、オールジャパンではなく、島根県版でもっと身近な事例）
 - 第 3 回報告会 ⇒ 宣言

【今後の研究活動の方向性について】

1. 生物多様性の浸透
生物多様性国家戦略の4つの基本戦略の「生物多様性を社会に浸透させる」ことが最重要。
技術士会会員が、生物多様性を知っているのだろうか？
まずは技術士会から浸透させ、意識の共有を行い、順次、広げていく。
2. 設計情報に役立つような事例研究や取り組み（生物多様性と異分野の交流）
3. 環境教育…総合学習や自然観察会にも技術士会から人材を派遣する。
4. 島根県版の生物指標

【平成23年度の研究活動について】

1. 生物多様性の浸透
技術士会の中で意識調査のアンケートを実施し、現状を把握する。
2. 初年度の活動（案）
セミナチュラルな自然の代表として、山王寺棚田・大原新田棚田を視察し、その成果を各自とりまとめる。

3) 意見交換会を通じて考えたこと

生物多様性条約や生物多様性国家戦略に関する情報は、環境省等の資料を勉強すればある程度体系的に理解することができる。しかし、生物多様性の重要性について実感を持って理解し、他者が納得する言葉を得ることは極めて困難である。

意見交換会を通じて、生物多様性という言葉の奥深さや曖昧さに改めて気づかされた。私自身は、生物多様性の重要性は理解しているつもりでいたが、それを他者（特に、生物多様性に興味ない人）が納得できる言葉で表現する術は持ち合わせていないことを痛感した。これは、日常生活に対する生物多様性の貢献が学術的に証明されていないこと、日常生活の中に生物多様性を感じにくい社会環境になっていることが関係しているかもしれない。

生物多様性の意味について議論し、生物多様性に興味がない人でも納得できる言葉を探すこと、それが、本分科会で最初にクリアすべき課題と考える。

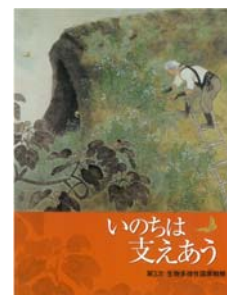
3.2.生物多様性に関する勉強会

意見交換会において、生物多様性の基本的な情報を確認し、各自が共有する必要を感じたため、佐藤技術士を講師として勉強会を企画・開催した。環境省パンフレット「いのちは支えあう」（右参照）を参考に、生物多様性国家戦略の概要をわかりやすく説明していただいた（図-2に骨子を示す）。

参考までに、環境省ホームページにおいて以下の情報が提供されている。

- ・自然環境局 自然・生物多様性（インデックス） <http://www.env.go.jp/nature/>
- ・自然環境局 里地里山の保全 <http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>
- ・自然環境局 外来生物法 <http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html>
- ・生物多様性センター 生物多様性ホームページ <http://www.biodic.go.jp/biodiversity/>
- ・生物多様性センター 生物多様性情報システム <http://www.biodic.go.jp/J-IBIS.html>

（ホームページアドレスは、平成24年1月現在のもの）



1) 生物多様性とは

生物多様性条約では、生物多様性を「すべての生物の間に違いがあること」と定義し、「生態系」、「種」、「遺伝子」の3つのレベルでの多様性があるとしている（右記参照）。

地球上の生き物（人間を含む）は、様々な関係で繋がっており、人間は生物多様性がもたらす価値を将来にわたり上手に利用していくことが必要とされている。

- ・生態系の多様性：干潟、珊瑚礁、原生的な森林、湿原、里地里山、大小の河川など、いろいろなタイプの自然があること。
- ・種の多様性：動植物から細菌などの微生物まで、いろいろな生き物がいること。
- ・遺伝子の多様性：同じ種でも多様な個性があること。異なる遺伝子をもつことにより、環境の変化や病気の蔓延が起こっても、全滅する可能性は低くなる。

2) いのちと暮らしを支える生物多様性

生物多様性の役割について、日常生活と関連づけて説明されている。

3) 【課題】4つの危機

本来豊かであるはずの日本の生物多様性について、今存在する4つの危機について説明されている。

4) 100年先を見据えたグランドデザイン

豊かな生物多様性を将来にわたって継承し、その恵みを持続的に得ることができる「自然共生社会」づくりのための目標として、以下の3つの目標が掲げられている。

- ・各地域に固有の動植物や生態系の保全、生態系ネットワークの形成により、国土全体の生物多様性を維持・回復する。
- ・生物多様性を減少させない方法で、世代を超えて、国土や自然資源の持続可能な利用を行う。
- ・国際的な視点や国民のライフスタイルの転換を含めて、生物多様性の保全や持続可能な利用を社会経済活動の中に取り込む。

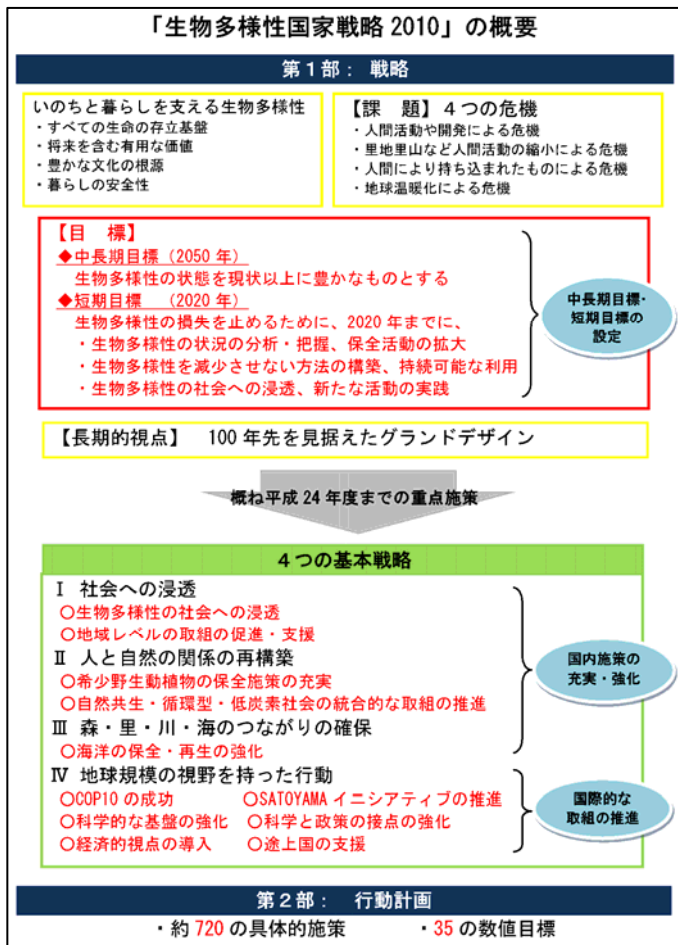


図-2 生物多様性国家戦略 2010 の概要（環境省HPより）

5) 勉強会を終えて

この勉強会によって、生物多様性を取り巻く現状や基本的な考え方について、体系的に把握することができた。また、意見交換会の議論が少しずつかみ合うようになってきた。

反省点（私の）としては、幹事としてこの勉強会を研究部会員以外に周知しなかったことである。豊かな自然に恵まれた島根に生きる技術者が、島根における生物多様性を考え、その価値を発見し、具体化していくのは、これからのあるべき姿と考える。そのための基本情報を得る場として、勉強会は貴重な機会と考えられ、平成24年度以降も、生物多様性に関する勉強会を企画したいと思った。

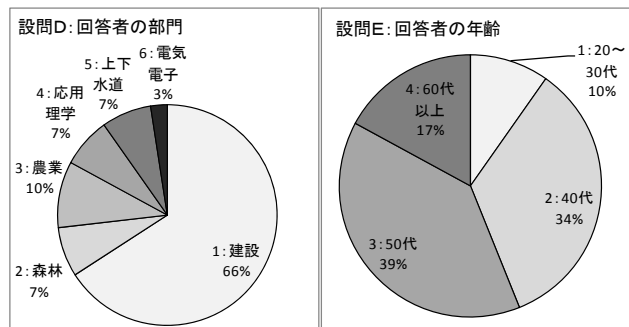
3.3.生物多様性に関するアンケート調査（意識調査）

島根県技術士会の HP を通じて、生物多様性に関するアンケート調査を行った。アンケートの回答期間は 12/16～12/26 と短期間であったが、計 41 通の回答を得ることができた。

1) 回答者の属性（設問 D・E）

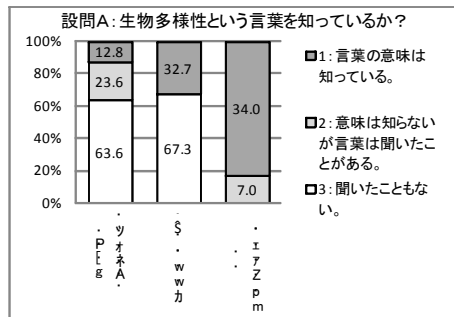
回答者の部門は、建設、森林、農業、応用理学、上下水道、電気電子の計 6 部門であり、建設部門の比率が高かった。

回答者の年齢層は、50 代（39%）が最も多く、次いで 40 代（34%）、60 代以上（17%）、20～30 代（1%）の順であった。



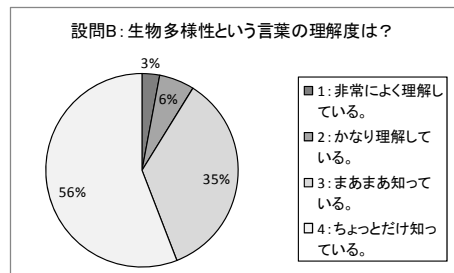
2) 生物多様性という言葉を知っていますか？（設問 A）

技術士会の回答の 8 割以上が“言葉の意味を知っている”であった。また、環境省、某 S 大学学生のアンケートでは、6 割以上が“聞いたこともない”との回答であったが、技術士会に“聞いたこともない”の回答はなかった。島根県技術士会会員の意識は高い、あるいは回答者の意識は高いと考えられる。



3) 生物多様性という言葉の理解度は？（設問 B）

設問 A で“言葉の意味を知っている”と回答した 34 名の内、半数以上が“ちょっとだけ知っている”との回答であった。“非常によく & かなり理解している”との回答は 9%（計 3 名）であり、生物多様性に関する知識について自信を持っている人は少ないと考えられた。



4) 一番重要と思う生物多様性の危機は？（設問 C）

“人間活動や開発による影響”と回答した人が半数以上を占めた。次いで、“外来種や化学物質などによる影響”であり、“人の影響が減ることによる影響”との回答が最も少なかった。

二番目に重要と思う回答をみると、一番目に“開発”と回答した人は“外来種等”、“開発”、“地球温暖化”の順に多かった。一番目に“外来種等”とした人は“開発”、“地球温暖化”、“外来種”の順であった。一番目に“人の影響が減る”、“地球温暖化”と回答した人は“開発”という回答のみであった。

“開発”を 1～2 番目に重要な危機と回答した人は 90% と圧倒的に多かった。想定内であるが、技術者は開発行為に携わる機会が多いからと考えられる。個人的に意外だったのは、“外来種や化学物質”の回答が多かった点である。他の危機と比較して、外来種等に関しては多くの情報が提供されているからと考えられる。

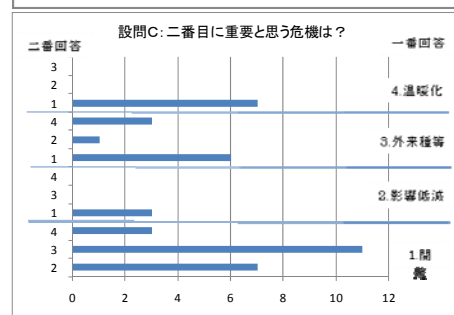
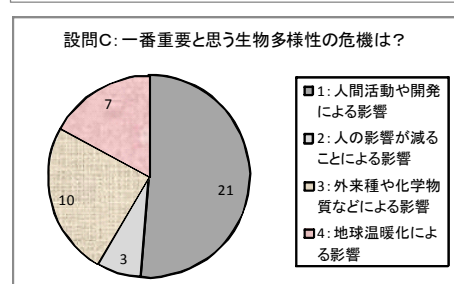


図-3 アンケート調査結果

3-4. 棚田への現地視察

1) 現地視察した棚田の概要

島根県内には、農林水産省が「棚田 100 選」として認定された棚田が 7 箇所あり（図-4 参照）、その内、島根県東部にある山王寺棚田、大原新田棚田の 2 箇所を対象に、現地視察を行った。

現地視察を行った棚田の概要は、表-2 に示すとおりであり、いずれの棚田も土地改良事業の導入はなく、地域の方々が地域づくりと関連づけて保全に取り組まれていることは共通するが、ベースとなる地形、成立要因、景観的な特徴は大きく異なる。

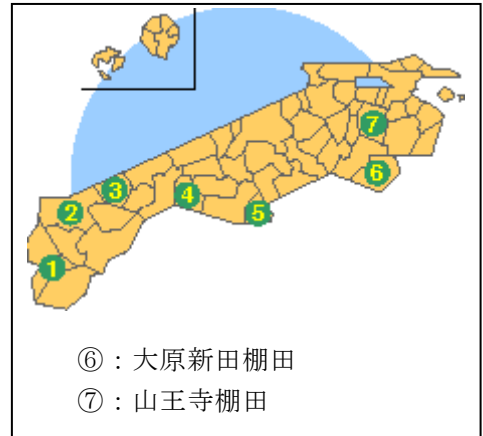



図-4 棚田の位置

表-2 現地視察した棚田の概要

名 称	山王寺棚田	大原新田棚田
棚田の位置	雲南市大東町山王寺	奥出雲町大馬木大原
保 存 組 織	山王寺棚田実行委員会	大原新田棚田保全管理委員会
棚田の概要	<ul style="list-style-type: none"> 平均勾配：1/8 団地面積：19ha 枚数：200 枚 水源：天水・ため池 法面構造：土羽 開発起源：近世（戦国～江戸）頃 対象農家数：36 戸 推薦理由（国土の保全）：国土の保全：耕作により災害を防ぐ機能を果たしているとともに、水源の涵養の機能も果たしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 平均勾配：1/8 団地面積：4.9ha 枚数：38 枚 水源：河川（溪流を含む） 法面構造：土羽 開発起源：中世（平安～室町）頃 対象農家数：6 戸 推薦理由（景観）：本地区は、大馬木の代表的な景観の一つであり、地区住民から親しまれている。土地改良事業の導入も無く、開墾当初の地形をそのまま受け継いできている。
棚田の写真	 <p>県内でも規模の大きい地すべり地形と、その地形を活かした美しい棚田をみることができ。地すべりによりできた緩傾斜は水田として利用され、自然現象である地すべりと人間生活が共存している。</p>	 <p>江戸時代にかんな流し（砂鉄採取地跡）によりできた土地を畑、その後水田として造成し、現在の水田となった。一枚一枚の田の面積は広く、当時の技術の高さがうかがえる。</p>

〔出典〕「日本の棚田百選」（社団法人 地域環境資源センターのHP より）

「山陰・島根ジオサイト地質百選」（島根地質百選選定委員会 HP より）

2) 現地視察の内容

現地視察では、地元代表者（保存組織）への聞き取り調査を行い、生き物やその生息・生育環境の変遷などの情報を収集するとともに、棚田および周辺を踏査した。また、山王寺棚田については、生物の生息・生育環境の観点から現地踏査を行った。

山王寺棚田での地元の代表者への聞き取り状況→



3) 聞き取り調査結果

過去から現在にかけて、水田周りの土地利用は大きく変化していないようであったが、周辺の山林の利用は大きく変化したようである。一般的な社会現象と同様、下草刈り・薪炭林施行などの里山管理は行われなくなり、山林部の植生変化が認められた。水田周りなど、過去からあまり変化していないような箇所でも、カエル類、トンボ類の変化があるようであり、土地利用意外の要因も生き物の生息・生育に影響を与えている可能性が示唆された。

地元の方の生き物に対する認識であるが、普段の生活や農作業に影響を与えるイノシシ、スズメなどへの関心はあったが、棚田周りに生息する小型サンショウウオ（カスミサンショウウオなど）、田面の小型雑草（ミズマツバなど）についての認識はなかったように思う。大原新田では、現地確認した“ミズマツバ”やその生態を地元の方に紹介したが、“心が豊かになるようだ”との感想をいただき、棚田の生き物の発掘（？）が、地域に貢献できる可能性を感じた。

両棚田とも、多くの現地視察を受け入れているようであるが、生き物に着目した視察は初めてのようであった。農繁期の多忙な中、現地視察に協力していただいた地元の方に感謝を申し上げたい（聞き取り結果は表－3参照）。



表－3 地元代表者への聞き取り調査結果

	山王寺棚田	大原新田棚田
植物・植生	<ul style="list-style-type: none"> 昔はマツタケ山があったが、今は荒れ放題である。マツは、マツ枯れになる前に売ってしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> 畦にはアザミ、キクなどの花の咲く植物が昔は多かったが、最近は少なくなった。 山裾にはオミナエシ、キキョウ、センブリなどが昔はみられたが、今はなくなった。 棚田脇の小河川では、上流の開発に伴う砂の堆積によりツルヨシが増えてきた。 竹は昔からあったが、次第に広がっている。
動物	<ul style="list-style-type: none"> キツネ、アナグマ(?)、テン、ムササビ、キジ、ヤマドリ、イモリ、マムシ、フナ、ドジョウ、エビ類、トンボ など 〔増えた種〕 タヌキ、イノシシ、カラス、サギ類 〔減った種〕 ウサギ、トビ、スズメ、ヘビ類(マムシ等)、カメ類、カエル類、メダカ、タニシ 	<ul style="list-style-type: none"> クマ、サル、キツネ、ウサギ、イノシシ、ヤマバト、トビ、ヒキガエル、カジカガエル、メダカ、ドジョウなど 〔増えた種〕 タヌキ、ヌートリア、サギ類(数年前から)、ヤマドリ、キジ 〔減った種〕 スズメ、ツバメ、マムシ、イモリ、トノサマガエル
林野の利用	<ul style="list-style-type: none"> 昔はマツタケ山があったが、今は荒れ放題である。マツは、マツ枯れになる前に売ってしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> 昔は、棚田周辺の草木(山草)を牛小屋に敷いて糞と一緒にしたものを堆肥として利用した。水田の2~3倍の面積の林野を利用し、毎年伐採した。草はササなどがよい。 薪炭の採取は、その外側の林野を活用した。炭焼き小屋も少しあった。

4) 現地踏査結果 (11/13 実施)

山王寺の水路は、3面張のコンクリート水路であり、水田や上下流間の連続性（移動性）は期待できない。一方、畦はチガヤを主体とした二次草地であり、水田と周辺環境（樹林）との連続性は確保されていることから、水田周りは良好な生息・生育環境として機能していると考えられる。調査時期が晩秋のため、生き物はほとんど確認されなかったが、早春季には水田と周辺の森林環境の連続性を指標とするカスミサンショオウや水田周りを利用するトンボ類が確認できる環境と考える。

なお、周辺の樹林は、以前はマツタケや採取できるようなアカマツ林であったようであるが、現在は、落葉広葉樹を主体とした雑木林、植林地、竹林となっていた。休耕田は、乾湿の度合いによってヨシ、ススキ草地となっていた。また、休耕の程度によってススキか水田雑草か、多様な環境が存在していた。現地踏査時の状況を図-5に示す。



図-5 山王寺地区における現地の状況

5) 現地視察を終えて

棚田の自然は、四季折々で様々な姿を見せる。生き物の世界も同様で、四季の変化に順応して様々な生き物が棚田で生活している。平成 23 年の現地視察は、秋（晩秋）に行ったものであり、まだ、棚田の一部しか捉えていない。棚田の季節は、春以降も秋とは異なる姿をみせるだろう。その中には、地元の人にも気づかない小さな世界もあるだろう。

棚田の自然は、水田まわりだけが重要ではない。水田、河川、周辺の樹林が一体となって、一つの生態系を構成する。例えば、早春になると、普段は山林で生息していたカスミサンショウウオが水田に降りて産卵する。この営みは、普段の生活の場である山林、産卵の場である水田、両方を行き来するための移動経路が全て必要である。

棚田は、人の営みと共存しながら、生き物が持続的に生息できる環境を残している貴重な場所である。今後は、耕作のスケジュールを踏まえて早春季、春季、夏季に現地調査を行うことにより、営農と生き物との関係について把握したいと考えている。幸い、視察した 2 箇所（箇所）の棚田は異なる特徴を持っており、その違いを把握することにより、人の営みと生き物（生物多様性）との関係をより深く考察できることに期待している。

3-5.その他

1) 山王寺沢池での外来種駆除

山王寺地区には、農林水産省により「ため池百選」に選定された「うしおの沢池」がある。このため池は、約 50ha の山王寺棚田を潤す重要な水源となっているが、近年、意図的な密放流により特定外来生物であるブラックバスが増えている。その対策として、「池干しによる外来種駆除」が 11 月 6 日に実施された（分科会活動として参加はしなかったが、3 名が個別に参加した）。この活動により、1080 匹のブラックバスが捕獲された。

うしおの沢池には、レッドデータブック記載種であるスプタ属の一種が多数確認された。それ意外にも、沿岸域にスゲ属などの抽水植物が生育し、生き物の生息・生育環境として良好さを感じることができた。

2) 食で感じる生物多様性

10 月 10 日の環境学習会の後、昼食を兼ねて山王寺地区に近い「渡部農園」で昼食を含む意見交換会を行った。ここのメニューは 1 種のみ（3,300 円/名）であり、里山の恵みを受けた食材が食べきれないほど出てくる。料理は、私にとってはなつかしの“田舎料理”であり、生物多様性の豊かさによって得られる自然の恵みを食することができた。近年、植物工場など、自然とは隔離して食料を生産する手法も開発されているが、食料の基本は、生物多様性の中にあることを実感した。ちなみに、食べきれず残った料理は、持ち帰って食べることが基本となっている（残したまま帰ったら叱られます）。 **m o t t a i n a i ! !**

忘年会では、地元牧場産の肉を提供する焼肉屋を会場とした。島根には、豊かな食料が豊富にある。地産地消。これも生物多様性の恩恵があってこそその言葉である。日常生活と生物多様性を結びつける言葉を少しでも多く見つけたいと思った。



4. 今後の活動

4-1.平成 23 年度の補足活動

平成 23 年度の現地視察は、棚田の秋の状況のみ確認した。平成 24 年度は、山林性両生類の繁殖時期となる早春季（4 月頃）、多くの植物が開花・結実する初夏～夏など、他の季節の状況も確認したい。

4-2.平成 24 年度の活動

平成 24 年度の具体的な活動内容は、研究分科会の中で検討中である。これまでの意見交換会では「自然環境に配慮した事業の視察」が有力候補となりそうである。環境省が整理した“生物多様性の 4 つの危機”のうち、平成 23 年度の活動内容が第 2 の危機〔人間活動の縮小による危機〕に沿ったものであったのに対し、平成 24 年度の活動は第 1 の危機〔人間活動や開発による機器〕を対象とした活動になるかもしれない。平成 23 年度に実施したアンケート調査や参加者の意見を踏まえて議論し、平成 24 年度の活動内容を具体化する予定である。

4-3.長期的な活動

今後の活動について、「生物多様性の浸透」、「事例研究」、「環境教育」、「島根県版の生物指標」などのテーマがあがっている。このうち、「環境教育」、「島根県版の生物指標」については短期間で対応できるものではないので、長期的な観点で取り組んでいきたいと考えている。

個人的には、「島根県版の生物指標」やその他の技術開発にも最終的には取り組みたいとの思いはある。この思いは、東京在住の若手技術者が企業の垣根を越えて、生態系評価手法の一つである「HEP (Habitat Evaluation Procedure)」の研究を数年単位で行い、学会発表している事例に刺激を受けたからである。生物多様性がまだ豊かと考えられる島根県の技術者が、各々の経験を踏まえた議論に基づき、生物多様性に関する意見や技術を全国的に発信することは意義深いことと考える（意見交換会にあった“宣言”もその一つである）。

5. おわりに

私は、生物多様性と日常生活は同じ舞台の上にあると考えている。生物多様性は保護・保全すべき弱いものではなく、人間の日常生活（定義は色々あるが・・・）を維持するための必要な基盤と考えている。また、人間の行為（開発を含む）も生物多様性の範囲内と考えている。

今回の活動を通じて、生物多様性という言葉の曖昧さ、その価値に気づく難しさを改めて認識した。冒頭で述べた“ECO”という言葉に関連して、生物多様性を研究する生態学（ECOLOGICAL）とECONOMY（経済）には共通点が多いことも感じた。“風が吹けば桶屋が儲かる”ではないが、様々なものが繋がり合っている現象を捉えるものとしては同じである。昔から、生物多様性を考えるために、経済学の勉強も必要と考えていたが、益々その欲求が高まった。それは、両者が似通ったものであること意外にも、人間の価値観の背景には必ず経済学が存在することにも起因する。

日常生活と生物多様性は密接に関わっていることは確かである。それを一般の人が理解しやすいよう具体化するための言葉（ツール）を探すが、私たち技術者の使命と考える。

私たちの研究分科会活動や、その発表をきっかけに、多くの技術者に生物多様性への関心を持っていただき、否定的な見解を含む様々な意見を出し、議論していくきっかけになれば幸いです。